

私見創見 Tuesday

冷えるとも固まるゴムを鼻の穴に詰め、一気に引っ掛けて鼻毛をすべて抜く道具。テレビの罰ゲームでよく使われている「ブラジリアンワックス」を、わが身で体験した。しかも、普段通りの八戸の理容店

で。痛くないようにと丁寧に処置してくれたにも関わらず、僕は思わず他のお客さんに聞こえるほどの声で「痛で」と言ってしまった。痛恨のミスだ。ああ情けない、くやし

暮らしを変えるウイルス

ないものを一つ余計に買ったように感じた。理容店筆サービスを受けるお店に行った時は、お願ひすることにした。そんなご縁で、ブラジリアンワックスを経験することができた。でも、あえて言いたいのだ。それは、「新型」だ。新型の家電、

「新型」になる社会

玉樹真一郎

八戸学院大 地域経営学専任教授



たまき・しんいちろう
1977年八戸市生まれ。八戸高、東京工業大、北陸先端科学技術大学院大を卒業。2001年、任天堂に就職後、プランナーとしてゲーム機「Wii」を企画担当。退社後にUターンして企画コンサルタント業を営む。著書に『「ついで」のつくりかた』など。

自動車、スマホ…それらは僕らの暮らしを変える力を持っているし、その点は新型コロナウイルスも同じだ。恐ろしい告白すると、新型ウイルス流行の結果、僕はたくさん新しい体験をしたし、結果良い思い出もたくさんある。たとえば、たくさんのお店がテイクアウトを業しむことができた。いちいち考え方が保守的な僕は、新しいお店に入るのを怖がってばかりで、たまに行く外食はいつも同じ店。けれどテイクアウトなら、新しいお店のお料理も気軽に楽しめる。地元には良いお店がいっぱいあることを知った。

風邪をひかなくなった。僕の衛生観念は間違いなく高まった。43年生きてても衛生観念を変えられずにいた僕を、新型コロナはいつでも簡単に変えてしまった。

例えば、野山に行く機会が増えた。山や海は簡単に密を避けられる。家でも密を避ける。自然は癒やしてくれる。結果的に僕はずっとかながらダイエットに成功したし、1年前には知らなかった山や海をいくつも知った。

そして、ブラジリアンワックス。「痛で」「でも薬し」。

再度強くなを押し付けていた。だが、新型コロナウイルス流行に良いことなごひとでもない。しかし、新型コロナウイルスという「新型」と出会ったことで、僕自身や僕の人生活新しいかたちが変わった。良いことであった。

思い返せば、生まれてこの

かた疫病で社会がパニックになるなんて一度もなかった。本当にしあわせなだけだ。それをしあわせにあらわすを、僕は僕自身を変えられずにいたのだ。

だから、これから僕は、もっと「新型」と向き合おうと思う。

新型コロナだつて、自分を変えるチャンスになる。僕は43歳。僕たち現役世代は、絶対的に第一に、まずはご自身とお年寄りを。第二に楽しく暮らして、働き、社会を維持する。そのためなら、これまで通りに暮らしたいと思ふ気持ちも捨ててしまおう。

コロナ禍の中、僕も少しづつ新型の僕になつていく。学校も会社も、町も社会も、そして皆さんも、新型になつていく。新型の世界。そう思うと、まるで秋の空のようだ。少し気分が晴れてくる。